

## 喜多方における学生プロジェクトチームによる まちづくり実践活動の教育成果と課題

まちづくり 蔵 中心市街地衰退  
まちづくり寄合所 サテライト研究室 実践教育

正会員 内山 隆史\*  
同 黒瀬 武史\*  
同 戸田 惣一郎\*  
同 北澤 猛\*\*

### 1. はじめに

東京大学都市デザイン研究室（以下、当研究室）は、社会や地域に開かれ、情報や研究の蓄積を通じまちづくりを支援するデザインセンターとしての役割を目指し、都市空間の基礎研究・手法研究だけでなくその定着を図るため実際のまちづくり活動に取り組んでおり、これまでに国内外の都市において、調査から計画・デザイン立案、実現のための組織・制度・事業の設計を行ってきた。

その一環として福島県喜多方市では「喜多方プロジェクト」として、2001年から地元市民団体らと協働し、資源調査やヒアリング、それを受けたまちづくり構想の提案、実験イベントの企画・運営支援などのまちづくり活動を実践してきている。2004年夏には市民との議論から発意されたまちづくり拠点構想が「まちづくり寄合所」として実現しており、当研究室はそのコンテンツのひとつとして「都市デザイン研究室喜多方分室」を提供し、ここを拠点に現在も調査・提案活動などを続けている。

本稿は、当研究室が喜多方において行ってきたまちづくりプロジェクトの概要を報告し、その教育成果・課題について考察するものである。構成としては、2章でプロジェクトの概要を述べ、3、4章で喜多方の概況と当研究室の主な取り組みを紹介し、5章で当プロジェクトによる教育効果について考察する。

### 2. 喜多方プロジェクトの概要

#### 2-1. きっかけと目的

当研究室は2001年、文化庁の委託をうけ「東北地方における都市間連携による広域観光圏整備計画調査～地域の文化財や歴史的特性を活かした広域観光圏作りに関する調査～（以下、文化庁調査）」を会津若松市・喜多方市に対し行った。その中で喜多方は現在有効活用されていない蔵をはじめとした豊富な歴史・文化的資源を活用することにより今後大きく発展していく可能性があることを指摘し、これを受け独自に「喜多方観光まちづくり提案」を作成し、その発表を兼ねたまちづくり懇談会「蔵のフォーラム」を2001年12月に地元の市民組織「蔵の会」と共催した。ここでの議論をきっかけに、蔵の魅力や利活用の可能性を地域に対して発信し、市内の多くの人とともにまちづくりを行う基盤をつくることを目的として、「蔵の会」と協働した実践的活動を始めた。

#### 2-2. プロジェクトの推進体制

当プロジェクトのメンバーは、例年修士課程1、2年の学生5、6名によって構成されている。助教授・助手が顧問として指導する立場にあるが、毎年の活動計画（調査、実験など）や市民に対する各種提言・提案、計画の内容は、地域の実情に即して学生が自ら考え、プログラムを組んで実行していくことを原則としており、顧問の教員は要所において助言や指導を行なっている。

学生は自ら立てた活動計画に基づいて調査や実験イベント等を企画し、市民との協働により実行してきた。また、実行された調査や実験の結果を踏まえて作成したまちづくりに関する提案を市民に提示して議論し、次年度の活動計画へとフィードバックしている。（図1）

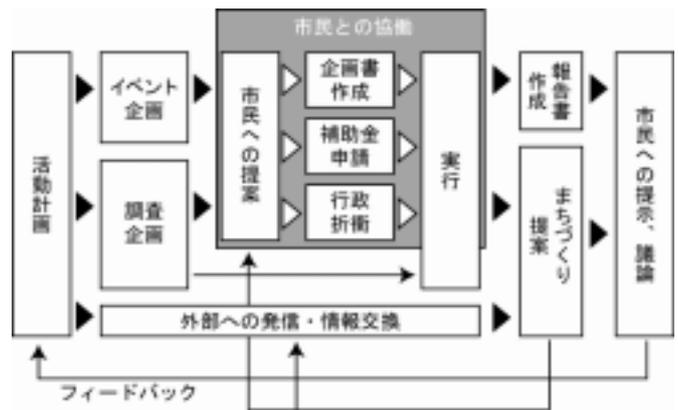


図1 喜多方プロジェクトの活動フロー概念図

#### 2-3. 活動のパートナー

当初は前述の「蔵の会」との協働を主としてまちづくり実験イベントの共催やまちづくり提案などの活動を行ってきたが、2003年にはまちづくり市民団体「会津北方小田付郷町衆会」設立を支援し、資源調査やイベント、「まちづくり寄合所」を通じた協働を始めた。また、本年度（2005年度）は福島県喜多方建設事務所から研究委託を受けまちづくり構想の作成やそれに向けた調査を行う予定であり、行政との協働も始まっている。

### 3. 喜多方の概況

#### 3-1. 喜多方市の成り立ちと概況

喜多方市は、福島県の北西部、会津盆地の北部に位置し、人口はここ30年間、約37,000人程度で推移している。

豊かな自然条件の下、良質な水、米を使った酒造業や桐材加工、漆器など伝統的産業が盛んであり、会津地方では会津若松市に次ぐ第二の商圏を形成してきた。現在は蔵とラーメンのまちとして知られ、年間観光客入り込み数は100万人を超える(2001年現在)。しかしながら、日帰り客がその中で9割を占めるなど、ラーメンを食べてすぐ帰るといふ実態も浮き彫りにされている<sup>1</sup>。

### 3-2. 喜多方の蔵について

喜多方市には蔵が市内に多数存在している<sup>2</sup>。その用途は多様であり、市街地では店蔵、醸造蔵、塀蔵、厩蔵、周辺集落では農作物や農具の貯蔵・収納蔵や、伝統工芸のための作業蔵・道具蔵などがある。また内部の細工に凝った座敷蔵や鏝(こて)絵などの装飾が多くみられるのも喜多方の蔵の特徴である。しかしそれら多くの蔵は、生活の中にとけ込んでいるため一見の観光客にしてみると発見しづらく、その魅力が直接的に観光に結びついていない。また、蔵をはじめとした資源は、生活スタイルの変化といった社会的要因と維持管理の困難さという蔵所有者の経済的要因のため、減少の一途を辿っている。



図2 喜多方市域と蔵が多数現存する地区(は1980市教委調査対象地区)

### 3-3. 地元住民組織の動き

市民の動きとしては、1995年に市内の蔵を愛する有志によって、「蔵文化」を守り育てていくだけでなく、蔵の新たな活用の仕方、更には喜多方というまち全体を発展させていくことを目的として「蔵の会」が設立された。主な活動として、婦人部会による空き店蔵を利用した市内の蔵所蔵の雛人形の展示や、屏風を持ち寄ったの展示

会などを開催してきた。また2002年にはまちづくり実験イベント「蔵みっせ(後述)」を当研究室と共催した。

2003年には小田付地区の住民団体「会津北方小田付郷町衆会」が設立された。この団体は「蔵を中心とする昔の町並みが残る一帯の景観を維持、向上させつつ最大限に活用する」ことを目的に掲げたまちづくり組織で、蔵のライトアップ事業や通りを歩行者天国にしたイベントなどを実現している。

## 4. 当研究室の取り組みと成果

当研究室が関わってきたまちづくりの取り組みの主なものを、以下に紹介する。(表1活動年表参照)

表1 喜多方プロジェクトの活動年表

2001	3月 文化庁より調査委託 →「蔵の会」との出会い 12月 調査報告会「フォーラム蔵の会と共催 「観光まちづくりの提案」発表
2002	6月 県地域づくりサポート事業助成金受理 11月 「蔵みっせ」共催
2003	3月 蔵のまちフォーラム2003 6月 小学校の総合学習の支援 蔵を題材として提案、支援「蔵探検」 10月 「小田付郷町衆会」立ち上げ支援 「100年プラン」の提示 12月 「蔵deしゃべんべ」の開催支援
2004	3月 「蔵の会」と協働して蔵探検ニュースレター発行 5月～7月 建築学会設計競技「マチコロ」 7月 まちづくり寄合所の開設 12月 東北まちづくり学会(まなびあい)開催

### 4-1. 「観光まちづくり提案」と「蔵のフォーラム」共催(2001.12)

文化庁調査の調査結果を受け、当研究室は「喜多方観光まちづくりの提案」を作成した。喜多方の歴史・文化・生活の象徴である蔵をキーワードとして、単なる産業活性化にとどまらず、喜多方の蔵文化を発展させ、生活者と観光客(来訪者)の交流・融合を図ったものとなっている。具体的には、小さな取り組みを効果的に結びつける「まちかどミュージアム」や、的を絞った核づくり、できることから徐々に活動を大きくしていくこと、などが計画されており、最終的には、生活と観光との調和、周辺集落と連携した広域「北方ツーリズム」の実現、喜多方のアイデンティティの確立などが考えられている。

さらにこの提案の発表も兼ねて、2002年12月、市内の蔵を改装したホールで蔵を中心とした喜多方のまちづくりをすすめていくため「蔵のフォーラム」を蔵の会とともに共催した。喜多方市長、市職員、商店主、一般の市

\*東京大学大学院工学系研究科修士課程

\*\*東京大学大学院工学系研究科助教授

\*Graduate Student, Graduate School of Tokyo Univ.

\*\*Associate Professor, Graduate School of Tokyo Univ.

民など、計 200 人程が来場するほどの盛況であった。この場で、当研究室が作成したまちづくりプランも発表し、「まちかどミュージアム」も話題の一つとなり、全体としては蔵を中心に、生活と観光がうまく融合したまちづくりを行っていくことの必要性が再確認された。

#### 4 - 2 . 観光まちづくり実験イベント「蔵みっせ」共催 (2002.11)

フォーラムでの確認事項を受け、喜多方の歴史・生活・文化の象徴である蔵を活かして、蔵自体の魅力や、その背景にある生活文化の魅力を顕在化させ、発信すること、また生活者・来訪者が共に関わるための仕掛けづくりを目的として、まちづくり実験イベント「蔵みっせ」を、蔵の会と商店街が中心となり、当研究室が協力するかたちで企画・立案した。2002 年 6 月「福島県地域づくりサポート事業助成金」を得て、7 月実行委員会をたちあげ、実現へと動き出した。

約 10 の企画の内、当研究室による中心市街地の蔵調査をもとに作成された「蔵マップ」は、今まで無かった蔵のプロットマップであり、市民にとって蔵の存在にあらためて気付き、まちを見直すきっかけとなった。

また企画の中心として考えられた「まちかどミュージアム」の実験においては、既に公開がなされてきた醸造業関連以外にも、展示候補となる物品や実演候補となる伝統技法にも光を当てる事ができることが分かった。これらのことから既存の公開施設も含めたまちかどミュージアムネットワークの実現は十分可能と考えられる。これによって、まちなか観光が推進され、市民と来訪者の交流が一層促進される事が期待された。

#### 4 - 3 . 「蔵のフォーラム 2003」共催 (2003.2)

蔵みっせの実践を経て、蔵についてより深い議論を行うことを目的として、2003 年 2 月に「蔵のフォーラム 2003」を再び蔵の会と共催した。先進事例として川越蔵の会、七日町商店街からの事例報告、当研究室より「蔵みっせ」の報告、専門家を交えたパネルディスカッションが行われ、最後に市民を交えて活発な議論が交わされた。ここでは、蔵の維持という意味では、伝建や景観条例などの制度や補助が重要であるが、仮に外観はそれで整ったとして、中身をどう活用して行くかが重要な問題であり、観光のスタイルの変遷なども含めて総合的に考えられるべき事であることが指摘された。

また、まずは小さな地区単位からでも、実践して行く事が大事であり、またそのような小さな活動をとりまとめる中枢として事務局が必要で、そこに情報を集積させることと、継続的にまちづくりを実践するための機能が必要であることも指摘された。

#### 4 - 4 . 総合学習「蔵学習」の支援 (2003.6) と発表会イベント「蔵 de しゃべんべ」共催 (2003.12)

次代のまちづくりの担い手となる世代が自らのまちの魅力を把握することは、継続的なまちづくり活動にとって重要である、との視点から、当研究室は蔵に関する市民の学習を、小学校の「総合的な学習の時間」(以下総合学習)において行うことを企画・提案した。

結果、市内 5 校で蔵を題材にした総合学習(以下、蔵学習)が実現し、うち 3 校について蔵の会会員とともに児童と一緒に蔵を回り授業をサポートした。また年末には、各校児童の学習発表と世代間交流の場として「蔵 de しゃべんべ」を開催、さらに児童へのアンケート、担当教員や校長へのインタビューを実施し、蔵の会発行の「蔵探検ニュースレター」を当研究室が作成した。

「蔵 de しゃべんべ」での子供達の発表は、それぞれ調べたことをしっかりとまとめており、アンケート結果と合わせて、蔵学習前後での児童の蔵への興味・関心の変化が見受けられた。一方、今後の課題として、支援組織の確立、調査から提案への学習レベルの発展、成果の発信方法の検討の必要性などが挙げられた。

#### 4 - 5 . 「会津北方小田付郷町衆会」設立と「小田付郷サバイバルプラン」作成 (2003.10)

2003 年 10 月には、当研究室の後押しもあり、中心市街地の小田付地区において地元の住民らによるまちづくり組織「会津北方小田付郷町衆会」が設立された。設立総会では当研究室は 100 年の先を見据えたまちづくりプラン「小田付郷サバイバルプラン(100 年プラン)」を提示し、会の方針に対して影響を与えてきた。現在も「町衆会」とは各種イベントや調査などで協働している。

「100 年プラン」では、蔵を残すこと以上に、蔵に象徴される喜多方独自の技術・文化・誇りといった精神性を次世代へつなぎ、育むことが重要であるとの視点の下、「ほんものをつくるまち」、「周辺集落とのつながり」など、小田付地区の将来ビジョンを提示した。

#### 4 - 6 . 「まちづくり寄り合い所」開設 (2004.7)

これまでの活動で明らかになった、「まちづくり情報拠点」や「まちづくりについて議論できる場」へのニーズを踏まえ、まちづくり情報ステーション、市民のミーティングスペース機能を備え、サテライト研究室を兼ねたまちづくりセンターを設立しようという気運が高まった。

そして 2004 年 7 月、文部科学省の「生涯学習まちづくりモデル支援事業」の助成金を利用し、まちなかの空き蔵を「蔵のまち喜多方・まちづくり寄り合い所(以下寄合所)」としてオープンさせた。

#### 4 - 7 . 「第一回東北まちづくり学会(まなびあい)」開

催（2004.12）

2004年12月、福島・山形・新潟の3県でまちづくり活動を実践している学生5チームを喜多方に招き、まちづくり情報の交換と、学生と喜多方市民とのネットワークづくりを目的とした「東北まちづくり学会（まなびあい）」を当研究室で企画、市民の協力を得て開催した。

2日間の行程で、1日目はシンポジウム形式で各自の事例報告の後、市民代表や市長などを加えたパネルディスカッションを行った。夜は学生と市民の交流促進と喜多方における民泊の可能性を探る実験を兼ねて学生たちが数人ずつに別れ地元の方の家に宿泊し、歓迎を受けた。2日目は学生たちに喜多方をより深く理解してもらうため、市内をめぐる「蔵めぐりツアー」を実施し、その後喜多方のまちづくりに関する意見交換会を行った。

1日目のシンポジウムにはたくさんの市民が来場し、4時間という長時間にも関わらず各地の事例に真剣に聞き入り、パネルディスカッションでは会場も巻き込んだ意見交換や会場からのまちづくりの宣言などが実現した。

## 5. 考察

### 5-1. 喜多方プロジェクトの教育成果

当プロジェクトにおける市民と学生の協働による教育的成果として、以下のような点を挙げる事ができる。

#### 学生に対する教育効果

「地域固有解」導出の訓練：当プロジェクトでは、前述の通り毎年の活動計画や各種提言・提案、計画の内容は、地域の実情に即して学生が自ら考え、プログラムを組んで実行していくことが原則となっている。型通りのプランニングを地域に適用するのではなく、学生が地域と連繋する中で、地域性を読解してまちの望むべき将来像を思い描き、具体的な空間やシステムの計画・デザインとして提案、さらにその実現に必要な手法を選択、創造していくという、まちづくりの基本的な考え方を、実践的なフィールドにおいて理解し、実践している。このような、方法論から自ら考える機会の獲得は大学の講義や演習では得ることのできない、実践教育特有の貴重な教育成果であると言える。

都市計画分野以外への視野の拡大：都市計画を学ぶ学生にとって、大学内のみで都市を論じることは、都市の持つ要素の総合性・複合性を単純化して考えてしまう危険性を孕んでいる。一方、当プロジェクトでは市民、行政、商業者、農業従事者など様々な立場の人々と触れる経験を持つことによって、例えば商店街の「景観像」を考える際に「商い像」を共に考えるなど、都市を総合的・複合的に見る視座を獲得している。

#### 市民に対する教育効果

まちの資源への気づき：我々が「よそ者」「学生」ならではの視点を持ちこんだことで、地元に住んでいては気づかないまちの魅力・資源に気づく体験を持つことができたとの声が多く聞かれた。

まちづくり意識の高揚：前述の「蔵みっせ」などのまちづくり実験イベントや「蔵のフォーラム」、「東北まちづくり学会」などの学習機能を持った市民会議的イベントを通して、学生と共にまちづくりを学び、まちづくりとは何かという認識や、まちづくりへの意識が高まった。結果として、地域の改善に興味を持って地域の為に働く人材が増えてきている。

まちづくり手法の学習：市民が学生とともにまちづくりを実践する中で、各種計画制度などへの理解が深まり、市民間での勉強会や制度適用の検討が進んでいる。

まちづくりを担う次世代への教育効果：「蔵を題材にした総合学習『蔵学習』の支援」を通じ、子ども達が自らまちの魅力を発見する機会を与えることができた。持続可能なまちづくりの実現のためには、このように次代の喜多方のまちづくりを担う人材が地域の資源を把握し、地域に対する関心を育む学習機会を提供することが非常に重要であるといえる。またその学習機会の提供には、小学校に対して大学生や市民の協力、地域の情報の集積が不可欠であることも確認された。

### 5-2. 今後の課題と展望

以上のような成果の一方で、以下のような課題も浮き彫りになってきている。

他学科、他大とのコラボレーション：都市、建築、経済、法、商業など、複合的な問題に関わるまちづくりという行為に関わる中で、単一の分野の学生でこれを支援することには限界がある。「東北まちづくり学会」の狙いもそこにあったが、他学科、他大とのコラボレーションを進め、多角的な視点でまちづくり支援ができる環境を整える必要がある。それが学生・市民ともにさらに広域・多様な視野を持つことに繋がると思われる。

情報の蓄積・公表：今後の市民主体のまちづくりを進める上で、これまでの活動内容や、調査結果を、いつでも参照できる状況を作る必要がある。まちづくり寄合所を拠点として、情報の蓄積・公表システムを整えることが求められる。

今後は以上のような視点でさらなる実践活動を行っていきたい。

<sup>1</sup> 統計きたかた平成14年版、喜多方市役所

<sup>2</sup> 一説には市内に2,600棟あると言われている